



コデク・コデク

(小大工=ひとりまえてない大工のこと)

昔、むかし高鍋の中鶴に大変腕のよい甚兵衛じんべえという大工さんがいました。腕のよいことをいいことにしていばるので、仲間ではいやがる者もいたのです。

ある年のはじめ頃のことです。去年から手掛けていた町の人の家が立派に出来上がり、新築祝いがあった日のことです。大きな家でしたからご馳走が沢山出て、お酒もふんだんにありました。やがて祝いの宴も終わりに近づきましたので、甚兵衛さんはお礼をのべていとまを告げ家路につきました。

お土産をいっぱいもらって外に出ますと、ちょうど十五夜様なのでしようか、空にはまん丸いお月様が出てまるで昼間のようです。甚兵衛さんは、鼻歌を歌いながら下町から中鶴の道を帰っていきませんが、お酒をしたたか飲んでいたので、足下がふらつき千鳥足です。しかし、転んでなるものかと一歩、一歩踏みしめながら歩いていきます。

道の両側は、月明かりに映えて青々とした田んぼが、向こうの山すそまで広がっています。おまけに田んぼの中からは、蛙が「グワァ、グワァ……」と賑やかに囀はなりたてて、気分は最高です。

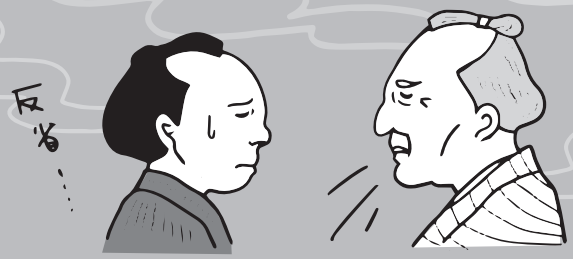
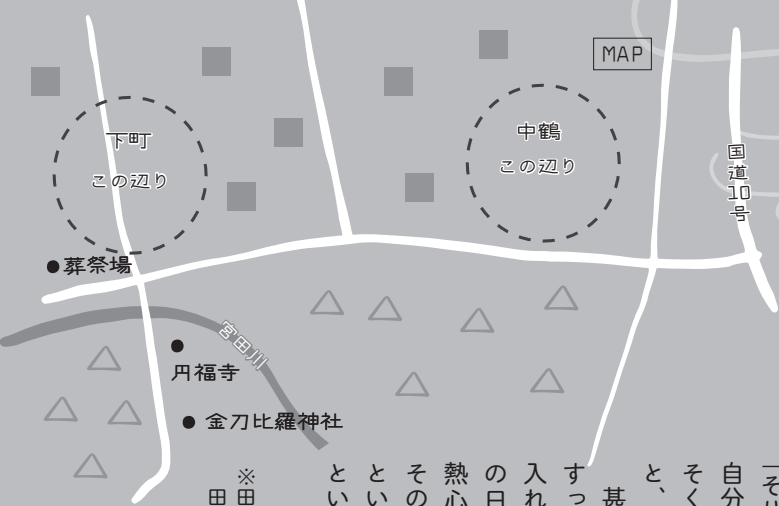
ところが甚兵衛さんが、馬ん糞橋うまぐそばしのところまで来たときのことです。蛙の鳴き声はたとと止んでしまいました。甚兵衛さんは「おや、おかしいな」とつぶやきながら、耳をすましますとしばらくして、また一斉に鳴きはじめました。甚兵衛さんはホッとして歩きかけましたが、蛙の声がどうもおかしいのです。どうも蛙たちは声を揃えて何か言っているようです。立ち止まり耳をすませてよく聞くと蛙たちは、

「コデク、コデク、コデク……」と、鳴きだしているのです。いささか酔っていた甚兵衛さんでしたが、あまりにも人を馬鹿にしたこの言葉にかんしゃく玉が破裂し思わず蛙どもに向かって、

「俺はコデクじゃねーぞー、立派な大工のとうりようじゃぞー」と、がなりたてました。その途端蛙どもは、一斉に鳴くのを止めたが、しばらくするとまたも

くさくさ





「コデク、コデク、コデク……」

の大合唱です。その声は前にもまして大きく聞こえてきます。甚兵衛さんは、いよいよ腹を立てて、いつそう大きな声を張り上げて、

「馬鹿にするな、コデク じゃねえぞー。わからんのか。今日出来た新築の家でもわかるじゃろが」

と、怒鳴り返しました。蛙たちの声はその大きさに驚いたのか、ハタと止みましたが、しばらくするとまたもや、

「コデク、コデク、コデク……」

と、耳をつんざくような大合唱です。甚兵衛さんが、何回繰り返しても同じことでその声は益々大きくなるばかりです。もういかなる甚兵衛さんでもいたたまれず、その場から一目散に逃げ出してしまいました。

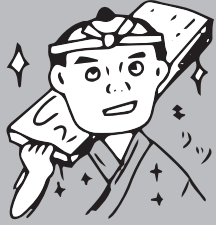
やっとの思いで家にたどりつくと、手に持っていた土産を放り出し、父親にこのことを話しましたが、父親は息子に向かって静かに言いました。

「そりやそうかも知れん。近頃のおまえは腕を磨くことより、自分の腕を自慢することばかりじゃ、今のまんまじゃ『そくりデク』で、誰も相手にせんごつなるぞ」と、いいました。

甚兵衛さんは、蛙の声と父親の言葉ですっかり酔いもさめ、自分を恥じて心を入れかえる決心をしたのです。そして次の日からは、人が変わったように仕事に熱心になり、腕を磨くようになりました。そのかいがあつて後には、近くの村や町には2人といない程の立派な腕を持った、大工のとうりようになったということです。

※田村さんが幼い頃、お父さんからよく聞かされた話で、田村さんも大変励みになったということです。

(採話：養江地区 田村克豊)



定期的に発行します
保存してね!



ソバ畑の川渡り

昔、染ヶ岡あたりは今のような立派な畑や道はなく、松山や竹やぶや雑木林の間の細い小道を行くと通山の村があつて持田との間には家はなく、昼でもたまきやきつねをよく見かける所で、村の近くに少し畑があつた。

ある秋の夕暮れ、神主だった勝之じいさんが通山の村祭りから帰っていると、向こうのソバ畑の中を1人の男が着物の尻を胸のあたりまで高々とからげて、「おお深けおんじや深けおんじや」とつぶやきながら渡っている。変な男じやと見ているうちにおかしくなつて、「おーいソバ畑の中で何しちよつとかえ」と近づいて行ったら、1匹の子ぎつねが逃げて行つたそうなの。親類の祭りといつべこつそになち、帰りおつたら急にあたりが暗うなち、川があるじやねが、ちよつと渡ろうとしたら意外に深く尻をからげち渡りおつた。こりやソバ畑じやが」

それにしても子ぎつね、うまくばかしたものだ。

(採話：家床地区 永友千秋)

